



ロブ＝グリエにおける語りの戦略としての偽装－ 1960年代から70年代の作品を中心に

的場，寿光

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2010-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲5125

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005125>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	的場 寿光
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学 位 記 番 号	博い第 5125 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 22 年 9 月 25 日

【 学位論文題目 】

ロブ＝グリエにおける語りの戦略としての偽装－1960 年代から 70 年代の作品を中心に

審 査 委 員

主 査 教 授 松田 浩則
教 授 増本 浩子
教 授 中畑 寛之

関西外国語大学国際言語学部教授 神田 修悦

論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

ロブ＝グリエにおける語りの戦略としての偽装
—— 1960年代から70年代の作品を中心に

氏 名 : 的場 寿光

神戸大学大学院文化学研究科 (博士課程) 文化構造専攻

指導教官氏名 (主) 中畑 寛之 准教授
(副) 松田 浩則 教授
(副) 山口 光一 教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

的場寿光 「ロブ＝グリエにおける語りの戦略としての偽装 —— 1960年代から70年代の作品を中心に」

われわれはこの論文において、ロブ＝グリエにおける語る行為がどのような戦略に基づいているのかを明らかにするために、語る主体の位置が最も特権的な主題として扱われている60年代から70年代にかけての作品を中心に分析した。さらに『覗く人』および『迷路のなかで』の分析を通じて、『消しゴム』から『迷路のなかで』にいたる初期作品と60年代以降の作品とのあいだの断絶がどのように生じ、ロブ＝グリエの語りの戦略がどのように転換したのかを明らかにした。

第1章では、「和解しない作家」という評論における偽名の使用の分析を通して、ロブ＝グリエの理論的評論が彼の小説における真理として、小説の絶対的な解釈を提示するのではなく、あるひとつの解釈を提示することによって、小説における探求の意味を浮かび上がらせることが目的であることを示した。理論的評論と小説の関係は相互補完的であるというよりも、対立関係にあり、理論が小説を論理的な言説によって固定するのに対して、小説は理論を否定することによって、理論が小説のメタ言語であるような階層関係を解体する。こうした理論と小説の関係は小説においては語りの様態、語りの位置の対立として現れ、これらの異なる言説によって、論理的な秩序を構築するとともにそれを解体する二つの運動が対立しつつ共存する場として、テキストは構成されていることを示した。

第2章においては初期作品の『覗く人』と『迷路のなかで』を通して、ヌーヴォー・ロマンの理論的牽引者としての50年代のロブ＝グリエの革新性は、いわゆる伝統的な小説を特徴づける全知全能の神によって支えられた語りを攻撃対象とし、「真実を語る」という虚構の欺瞞性を白日の下にさらすことをめざしたことにある。しかしながらたんに虚構において「真理を語る」ことの欺瞞性を批判するのではない。なぜならそうすることは、みずからの言説を「真理」とであると標榜することによって、批判する対象と同様の欺瞞性を身に纏うという罠に陥る危険を孕んでいるからである。そうした罠にはまることなく、「真理」の欺瞞性を暴き立てるために、ロブ＝グリエが用いるのが「偽装」という戦略である。ロブ＝グリエは『覗く人』において、「真理を語る」時制と人称である、単純過去・三人称を基調として物語を語り、みずからを「真理を語るもの」と位置づけながら、矛盾のない

整合的な物語を語ることが不可能であること、その不可能性は「真理を語る」という衣を身に纏うことそのものにあることを示し、「真理を語る」という審級を内部から崩壊させた。その結果として語る主体の対象に対する優位性は失われ、主体と客体の反転が可能となり、誰もが語りの位置を占めうるようなテキスト空間が開かれることとなった。

第3章においては、ロブ＝グリエの作品の転換点と見なされる『快楽の館』の分析を通して、複数の人物によって語られる矛盾にみちたテキスト空間が、矛盾を解消することなく、同一の平面に共存させることによって、特異な空間、非・場とでもいえる空間を現出せしめ、それがロブ＝グリエにとってのエクリチュールの快楽へと到達させるものであることを明らかにした。この小説におけるもうひとつの特徴はステレオタイプの幻想をテキストの随所に散りばめていることである。それはロブ＝グリエの欲望の対象であるというのではなく、大衆的な欲望の表出であり、そうした他者の欲望をみずからの欲望と繋ぎとめることによって語ることで、幻想を解体することが目論まれている。

第4章においては、複数の語り手の入れ替えによって語られる矛盾にみちたテキストにおいて、それがいかに秩序を回復するかという秩序化の運動について『ニューヨーク革命計画』と『黄金の三角形の思い出』から抽出した。ロブ＝グリエのテキストにはつねに秩序への指向が存在している。それは無秩序な言葉の連鎖を切断し、繋ぎとめること、もう一つは幾何学的形態に示されるような認識の枠組みに収めること、それによって無秩序な言葉の拡散はひとつのまとまりとして秩序を、意味を回復する。しかしながらこうした秩序化へと向かう操作は必然的にそこから切り落とされた破片を生み出す。これらはテキストから消滅するかに見えながらも、新たな事物との結合を通じて、テキスト上にふたたび姿を現す。この新たな事物は、秩序を回復したテキストにおける剰余として、テキストを解体し、新たなテキストの秩序の再構成へと向かわせる。こうした解体と構築を繰り返すテキストの運動もまた、秩序へと向かう語りの位置とそれを逸脱する語りの位置の対立に置き換えることができ、その両者のあいだをめまぐるしく変転することも、偽装という戦略の一形態であるといえるだろう。

第5章においては、語りの位置の移行は、テキストという閉域を越えて、複数のテキストのあいだの横断をも可能にすることを明にするために、文学と絵画の領域を越えた 70

年代以降の現代芸術家との共同製作、なかでもルネ・マグリットの絵画にロブ＝グリエがテキストを付した『囚われの美女』の分析を通して、複数の主体による創造がいかなるものかを明らかにすることをめざした。複数の主体による創造には、他者との対話が主要なテーマとなる。とはいえそれは弁証法的な矛盾を解消するといった対話ではなく、他者のうちに自己を見、自己のうちに他者を見いだすという一種の鏡像的關係であった。テキストの隔たりを越えて訪れる事物は、みずからのテキストの整合性を解体すると同時に再構築の契機となる。この解体と構築の往復運動こそが、創作活動を導く快楽の源泉となる。

「誰がいかなる位置で語るか」という問いは60年代、70年代のロブ＝グリエの作品のなかで主題をなす問いであるが、それは50年代における全知全能の神の否定によってすでに胚胎されていた問いであるが、それが容易に目につかなかったのは、みずからが批判するものに同一化しつつ、それを内部から否定すべく、矛盾を暴き出すというように、倒錯的かつ遊戯的なものであった。50年代における語りの階層的秩序、言語とメタ言語との区別は、語られる対象に対して優位に立つものの無能さを露わにすることによって、海藻秩序は解体させられ、それ以降、対象に対する超越的な審級としての位置を占めることは不可能となる。60年代、70年代の作品が示す語りの様態は、こうした階層的秩序の崩壊した後、すべての事物が平行的な関係で同一平面に配置され、それぞれの意味を越えて、互いに置き換え可能な空間に立脚している。それによって語りを担う人物は、次々に変転しうようになる。みずからが語られる対象となるのではなく、語る対象となること、そのためにテキスト内では至るところに対立関係が打ち立てられる。こうした対立する人物による語りのなかで、誰もがみずからの位置で語るだけでなく、さまざまな人物を騙りつつ、みずからの位置をずらしながら、語るという事態に至る。このような矛盾にみちたロブ＝グリエの戦略にひそむ遊戯性はある彼のある一時期を画するものではなく、さらなる射程の広がりをもたらす可能性を秘めている。それは単なる韜晦といったものではなく、ロブ＝グリエに固有の、みずからの存在を賭けた真剣な戯れであるといえる。

論文審査の結果の要旨

氏 名	的場 寿光
論 文 題 目	ロブ＝グリエにおける語りの戦略としての偽装 ― 1960 年代から 70 年代の作品を中心に
要 旨	アラン・ロブ＝グリエは小説のみならず、理論的批評、映画、あるいは画家との共同製作など多岐にわたる創作活動を展開してきたが、それぞれの作品をひとつの統一的な像のもとに収めることは難しい。彼の小説と理論との関係に顕著に見られるように、それらの言説の間には多くの矛盾が存在しているからである。しかし、まさにこうした矛盾あるいは虚偽こそがロブ＝グリエのテキスト発生装置として機能している。本論文は、対立する言説の間を移動しつつ、言葉を紡いでゆくロブ＝グリエの遊戯的振舞いを「偽装」として捉え、相矛盾する諸言説が共存しうるロブ＝グリエのテキスト空間とはいかなるものであるのかを明らかにしようとしたものである。 第一章では理論的言説と小説の言説の関係が論じられている。「ヌーヴォー・ロマンの理論家」と目されるロブ＝グリエが提示する理論と小説における実践には多くの矛盾が指摘し得るが、そのこと自体否定的に捉えられるべきものではない。両者の矛盾対立は、語る主体と対象とが切り結ぶ関係の差異に起因している。理論的言説あるいはロブ＝グリエの小説に特徴的な、事物を客観的に描写するその眼差しは、対象を存在として措定し、主体と対象との間に乗り越えたい距離を導入するものである。それに対し、さまざまな人物が語り手の位置をめぐる争い、明確な指標もなく入れ替わっていくような 60 年代以降の彼の小説においては、主体と対象とを隔てる境界は消失し、対立するものが融合する空間が開かれる。理論的言説と小説における実践の間を絶えず行き交い、語りの位置をずらしながら語るもののうちにロブ＝グリエの語りの偽装性が如実に現れている。 この偽装という戦略が 60 年代にいかにして主題化されていくのかを考察するため、第二章ではそれ以前の作品、『覗く人』（1955）と『迷路のなかで』（1959）における語りの様態が分析される。ロブ＝グリエはその理論的著作において、超越的な神の視点に立ち、自らを「真理を語る者」と位置づけて物語を創造する 19 世紀的な小説を厳しく批判しているにもかかわらず、『覗く人』という小説はその 19 世紀的小説を特徴づける 3 人称・単純過去という人称・時制を用いて書かれている。とはいえ、それは「偽装」である。「真理を語る者」としてのこの語り手は整合性のある物語を構築し得ず、このことが逆に「真理を語る」という行為そのものの無効性を露わにしていく。物語から秩序を奪うのは、他者の言説の内部に自らの位置を見だし、それに同一化することによって己れの存在を確立していく主人公マチアスの存在の根底に横たわる無根拠さであり、決して語られることのないジャクリヌの死という空白の場面を隠蔽しようとする語り手の欲望である。超越的な視点による語りの解体はかくして語る主体と対象との間の距離を消失せしめ、相互に入れ換え可能な空間がそこに開かれることとなる。『迷路のなかで』における語り手の物語内部への侵入はこうした過程によって可能となったと考えられる。 続く第三章は、初期作品群とは一線を画し、ロブ＝グリエ小説の転換点と見なされる『快楽の館』（1965）を扱っている。さまざまな人物が語り手の位置を占めるこの小説においては、自分が知っていることを語る知の主体と想像の主体という二つの相対立する語りの極が存在し、人物たちはこの二つの極の間を揺れ動きながら言説を生み出していく。その運動は、超越的な視点による階層的な語りとは異なり、二つの対立する言説が、言語行為論の用語を借りれば認知・事実確認的言説と行為遂行的言説という二つの言説が、矛盾を内包しながらも、並列的に共存し得るテキスト空間をそこに現出させる。この対立関係を弁証法的に統合するような審級が存在しないことは、小説中で何度も繰り返し変奏されるエドゥアール・マヌレの死の場面によって示されていると考えられる。つまり、建物の一室に籠もり、机に向かって執筆を行う人物という役割を演じる彼の死が意味するのは、
主 査 記 載	松 田 浩 則
氏 名 ・ 印	

「作者」という審級そのものの死であり、矛盾を解消し、統合する審級の不在である。対立する言説によって生み出される複数の物語はそれを統合するものの欠如によって乱雑に散らばり重なり合うことになるが、また同時に、明確に隔てられていた二つの空間が不意に接近し、それを構成する事物同士が結合し、新たな物語を形作っていく契機ともなる。こうした矛盾するものの不意の出会い、あるいは共存こそ、『快楽の館』という作品が現出させる快楽の空間であり、これがロブ＝グリエにとって言葉を生み出す装置であると言える。

さらには、断片的な場面の散乱する空間と化すテキストに再び秩序を取り戻す反動的な運動も存在していることが、第四章における『ニューヨーク革命計画』（1970）および『黄金の三角形の思い出』（1978）の読解によって明らかになる。『快楽の館』で明確に主題化された複数の語りの位置がより先鋭化された形で現れてくる『ニューヨーク革命計画』では、もはや誰が語るのかを特定することは困難を窮め、位相の異なる言説が明確な像を描くことなく溢れ出るといった様相を呈する。しかしながら、そうした言葉にかるうじて意味を繋ぎとめる存在が姿を現す。それは無秩序な言葉の流れを断ち切るべく介入してくる対話者の存在である。対話者の介入は語り手によって羅列される言葉に区切りを入れることで意味を付与する、と同時に曖昧な箇所を明確にしていくのである。また、もうひとつの秩序化をもたらすものとして、テキストのさまざまな要素に見出せる幾何学的な形態を指摘することができる。『黄金の三角形の思い出』に現れるような三角形、円、長方形といった形態は、断片的に散らばる要素を結びつける一種の構成原理として、テキストに秩序を与えている。それぞれの形態を構成する諸要素は入れ換え可能であり、それゆえつねに解体と再構築を繰り返す形態の反復によって、テキストは秩序化と脱秩序化を繰り返す無限の運動と化すことになる。

最終章にあたる第五章では、70 年代におけるロブ＝グリエの新たな創作の形態である画家との共同製作がいかなる意図を持つものであったのかを示すため、『囚われの美女』（1976）が分析される。ルネ・マグリットの絵画作品に小説家がテキストを付すという形で製作されたこの作品は、彼の試みが新たな段階へ向かったことを記すものである。つまり、それまでの言説内部における対立から、異なる表象体系の間での対話による創作への移行をそこに認めることが出来る。マグリット絵画の連鎖とロブ＝グリエによる言葉は互いに共通した要素を描き出しながらも完全に重なり合うことはなく、ずれを孕んだ鏡像的な関係に置かれている。ミシェル・フーコーは、文字と図像によって事物を二重に捉えるカリグラムという用語を念頭に、マグリットの絵画を「こわされたカリグラム」と名付けているが、『囚われの美女』における文字と図像は単に分離しているだけでない。そこでは「見るもの」と「見られるもの」、「捉えるもの」と「囚われるもの」、「語るもの」と「語られるもの」という関係が反転することにより、異なる表象体系を並列させたそのテキストは「固定した」関係を維持し得ず、「可動的な」空間へと変貌するのである。

以上見てきたように、いずれか一方に身を置くことなく、つねに両者の間を移動しつつけることによって、固定した普遍的な真理としての物語ではなく、相異なる物が共存可能なテキスト空間が開かれる。対立する物が不意に結びつき、ふたたび分離していく。この運動によりそれまで語る主体を支えていた基盤は揺らぎ、新たな存在の地平が出現してくる。対立する言説のいずれが真にロブ＝グリエ的であるかを決定することは出来ない。それはどちらも偽装であって、対立する物の位置から自らを語るとい、己れの存在を賭けた戯れにロブ＝グリエを執筆へと駆り立てる原動力があり、それこそがこの稀有な創造者の快楽の源泉でもあると結論付けている。

本論文は、「偽装」というロブ＝グリエの戦略を読み解き、この一見矛盾した戦略のうちに潜む遊戯性に賭ける作家の真摯な姿勢を炙り出しただけでなく、「誰がいかなる位置で語るか」というその問いがある意味で彼の創作全体を貫く大きな問いであることを十分に示唆できている。

以上の審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者、的場寿光が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名	区 分	職 名	氏 名
主 査	教授	松 田 浩 則	副 査	教授	増 本 浩 子
副 査	教授	神 田 修 悦	副 査	准教授	中 畑 寛 之